

学位論文要旨

明治中期から昭和中期における遊戯・舞踊教育論の史的研究
— 幼児教育者、遊戯・音楽教育の実践家、舞踊教育家の視点から —

広島大学大学院教育学研究科
文化教育開発専攻 音楽文化教育学分野

D152487 戸江真以

論文題目

明治中期から昭和中期における遊戯・舞踊教育論の史的研究

— 幼児教育者、遊戯・音楽教育の実践家、舞踊教育家の視点から —

I. 論文構成

序章

第1節 研究の背景と目的

第2節 先行研究の検討

第I部 幼児教育者による遊戯・舞踊教育論

第1章 和田實の遊戯・舞踊教育論

第1節 和田實の経歴と幼児教育論

第2節 和田實の著書にみる「音楽的遊戯」論構築の変遷

第1項 『幼児教育法』(1908a)における唱歌および唱歌遊戯教育論の内容

第2項 『幼児保育法』(1913)における「音楽的遊戯」論の内容

第3項 『実験保育学』(1932a)と『保育学』(1943)における「音楽的遊戯」論の内容

第3節 雑誌における和田實の「音楽的遊戯」論の変遷

第1項 「幼稚園に於ける所謂共同遊戯に就いて」(1908b)の内容

第2項 「再び幼稚園の共同遊戯に就いて」(1908c)の内容

第3項 「聞かせる唱歌に就いて」(1932b)の内容

第4項 「保育事項としての遊戯に就いて」(1935)の内容

第4節 和田實の「音楽的遊戯」論の特徴

第2章 倉橋惣三の遊戯・舞踊教育論

第1節 倉橋惣三の経歴と保育論

第2節 倉橋惣三による遊戯・舞踊教育論の変遷

第1項 幼児教育研究初期—恩物中心保育への疑問と「動作遊戯」の教育的効果—

第2項 留学後から戦時下以前—遊戯・舞踊の公開批判と「ねらいどころ」—

第3項 戦時下—「目的保育」と保育内容解釈の変化—

第4項 戦後—「自発保育」と広義の芸術性—

第3節 倉橋惣三の遊戯・舞踊教育論の特徴

第3章 和田實と倉橋惣三による遊戯・舞踊教育論の比較検討

第1節 模倣の重要性

第2節 遊戯・舞踊教育に対する批判

第3節 考察

第II部 遊戯・音楽教育の実践家による遊戯教育論・リズム教育論

第4章 白井規矩郎の遊戯教育論

第1節 白井規矩郎の経歴

第2節 幼児を対象とした遊戯教育論

第3節 音楽と遊戯との関係に関する論

第4節 『韻律体操と表情遊戯』（1923）における遊戯教育論

第5節 白井規矩郎の遊戯教育論の特徴とその意義

第5章 高橋忠次郎の遊戯教育論

第1節 高橋忠次郎の経歴

第2節 高橋忠次郎による遊戯教育論の内容

第1項 遊戯の目的

第2項 遊戯の分類

第3項 遊戯と唱歌の関係

第4項 「幼年生」における体操

第5項 遊戯の教育的価値

第6項 「表出遊戯」に関する論

(1) 「表出遊戯」の問題点

(2) デルサート式体操への批判

第3節 高橋忠次郎による遊戯作品の検討

第1項 『実験唱歌遊戯書』（1901）における特徴

(1) 『実験唱歌遊戯書』の背景

(2) 山田源一郎の唱歌教育観・唱歌遊戯教育観

(3) 『実験唱歌遊戯教授書』の検討

① 緒言

② 凡例

③ 作品

(4) 『実験唱歌遊戯書』の特徴と意義

第2項 『幼稚園唱歌遊戯法』（1902）における特徴

(1) 『幼稚園唱歌遊戯法』の概要および研究の背景

(2) 『幼稚園唱歌遊戯法』の作品分析

①動作

②遊戯の目的・訓話

(3) 『幼稚園唱歌遊戯法』と『幼稚園唱歌』との比較

(4) 『幼稚園唱歌遊戯法』と雑誌『婦人と子ども』との比較

(5) 『幼稚園唱歌遊戯法』の特徴と意義

第4節 高橋忠次郎の唱歌遊戯教育論の特徴

第6章 土川五郎の律動遊戯および表情遊戯

第1節 土川五郎の経歴

第2節 土川五郎による幼児教育論

第3節 土川五郎の遊戯教育論

第1項 当時の遊戯教育への批判

第2項 土川五郎による「遊戯」と「舞踊」との差異

第3項 土川五郎による「律動的遊戯」論

第4項 土川五郎による「表情遊戯」論

第5項 土川五郎による日本舞踊および民謡に対する見解

第4節 土川五郎における遊戯教育論の特徴と歴史的意義の再検討

第7章 小林宗作のリズム教育論

第1節 小林宗作の経歴

第2節 小林宗作による「総合リズム教育」の概要および幼児教育におけるリトミックの活用

第1項 リトミックの効果

第2項 「リズム論」の内容

第3項 「リズム教育の意義」の内容

第4項 ジャック＝ダルクローズによるリトミックの問題点と解決策

第3節 幼児教育におけるリトミックの活用

第4節 小林宗作によるリズム教育論の特徴とその歴史的意義

第8章 白井規矩郎、高橋忠次郎、土川五郎、小林宗作による遊戯・リズム教育論の比較検討

第Ⅲ部 舞踊教育家による舞踊教育論

第9章 印牧季雄による学校舞踊教育論

第1節 印牧季雄の経歴

第1項 第1期（1899-1932年）

第2項 第2期（1933-1954年）

第3項 第3期（1955-1983年）

第2節 印牧季雄の学校舞踊論の特徴

第1項 「生活」に目を向けた「舞踊による教育」

第2項 舞踊教育における音楽の重要性

第3項 自然運動に立脚した舞踊教育

第4項 印牧季雄の保育における舞踊教育論

(1) 幼児の特性と舞踊教育の目的

(2) 幼児の舞踊教育における基礎練習

第3節 印牧季雄の舞踊教育観

第1項 「主知主義」教育への批判と芸術教育

第2項 情操教育としての舞踊教育と舞踊創作までの段階

第4節 印牧季雄における舞踊教材観

第5節 『文部省新訂小学唱歌各学年の舞踊』（1935）における印牧季雄の指導案の検討

第6節 印牧季雄における学校舞踊教育論の歴史的意義

第10章 石井漠の舞踊教育論

第1節 石井漠の経歴

第2節 石井漠による舞踊論

第1項 「舞踊詩」の創案

第2項 石井漠によるリトミックと「無音楽舞踊」の受容

第3節 石井漠による舞踊教育論

第1項 当時の舞踊教育への批判

第2項 舞踊教育の指導方法

第3項 「石井式舞踊体操」における教育的意義

(1) 「石井式舞踊体操」の理念

(2) 「朝の運動」の内容

(3) 「昼の運動」の内容

(4) 「石井式舞踊体操」における音楽の特徴

第4項 舞踊教育における音楽の役割

第4節 石井漠による舞踊教育論の特徴

第11章 印牧季雄と石井漠による舞踊教育論の比較検討

第1節 舞踊教育の目的

第2節 舞踊教育の方法

第3節 舞踊における音楽の位置づけ

終章 明治中期から昭和中期における遊戯・舞踊教育論の特質

第1節 総括

第2節 今後の課題

II. 各章の概要

序章

本研究の目的は、明治中期から昭和中期における遊戯・舞踊教育論の特質を明らかにすることである。これまで、子どもの遊戯・舞踊研究は、保育史、音楽教育史、体育教育史、舞踊史研究のなかで論じられてきたが、それらを包括的に検討し、子どもの遊戯・舞踊教育の全体像をとらえるという研究はなされてこなかった。したがって本研究では、子どもの遊戯・舞踊教育の全体像をとらえるために、幼児教育者、遊戯・音楽教育の実践家、舞踊教育家の舞踊教育論を検討する。

本研究の特色は、幼児教育者、遊戯・音楽教育の実践家、舞踊教育家の3つの視点から遊戯・舞踊教育論を検討するところにある。特に、幼児教育においては未分化に表現活動が行われるが、その背後には幼児教育者のみならず、各々の専門家たちによってその方向性が議論されている。あえて未分化である子どもの表現活動を分野別にとらえることで分野ごとの特性が明らかになると同時に、異なる分野間の関連性も解明されることが考えられる。

本研究で取り上げる人物は、第I部では和田實、倉橋惣三、第II部では白井規矩郎、高橋忠次郎、土川五郎、小林宗作、第III部では印牧季雄、石井漠である。彼等を研究対象としたのは、各々の分野で中心的立場となって活躍しており、その分野の代表的存在であるからである。彼等の遊戯・舞踊教育論を検討することにより、その分野の傾向と特徴が示され、分野間の関連性、すなわち本研究の目的とする明治中期から昭和中期までの遊戯・舞踊教育論の特質を明らかにすることが可能であると考えられる。

本論文では、時代背景や人物の理念に応じて、「遊戯」、「舞踊」を使い分ける。音楽をともなう遊戯は、明治期から大正初期は唱歌遊戯、共同遊戯、表情遊戯、遊嬉などと呼称され、大正期中頃には舞踊、ダンスの言葉も現れはじめる。

第I部 幼児教育者による遊戯・舞踊教育論

第I部では、幼児教育者の和田實（1876-1954）、倉橋惣三（1882-1955）の遊戯・舞踊教育論を取り上げ、検討した。両者とも東京女子高等師範学校に勤めた経歴をもち、雑誌『婦人と子ども』（後続雑誌『幼児の教育』）の編集に携わった人物である。彼等は、当時の幼児教育界を牽引している人物であり、彼等の論は、幼児教育における指標として広く普及していたと考えられる。

第1章 和田實の遊戯・舞踊教育論

第1章では、和田實の遊戯・舞踊教育論の特徴を明らかにした。彼は、途中から遊戯・舞踊教育を音楽教

育の一部として論じていることから、彼の論じる「音楽的遊戯」論構築の変遷をたどりながら、遊戯・舞踊教育論を検討した。

和田の代表的著作として、中村五六と共著の『幼児教育法』(1908a)、単著の『幼児保育法』(1913)、『実験保育学』(1932a)、『保育学』(1943)の4著書がある。また、彼自身が編集に携わった雑誌『婦人と子ども』(後続雑誌『幼児の教育』)に論考を寄せている。これらの著作物のなかから、和田の「音楽的遊戯」論および遊戯・舞踊教育に関する論を研究対象とした。

「音楽的遊戯」という言葉は、『幼児保育法』(1913)ではじめて出てくるが、「唱歌と踊を一緒にして音楽的遊戯」(和田 1913、p.182)であると述べている。したがって、この頃より音楽をとまなう遊戯・舞踊は、「音楽的遊戯」の一部であると認識していることが確認できる。そして、『実験保育学』(1932)では、『幼児保育法』(1913)には見られない「聞かせる音楽」が「音楽的遊戯」に付け加えられている。このことは、音楽教育界において音楽鑑賞の重要性が盛んに論じられるようになったことと、1926(大正15)年に「幼稚園令」が制定され、保育項目に「観察」が加えられたことが影響していると考えられる。

和田の遊戯・舞踊教育論の特徴として、遊戯・舞踊教育は音楽鑑賞を第一段階として行うべきであると説き、体育的側面よりも音楽的側面から遊戯・舞踊教育をとらえていることが指摘できる。

第2章 倉橋惣三の遊戯・舞踊教育論

第2章では、倉橋惣三の遊戯・舞踊教育論の特徴を明らかにした。倉橋の遊戯・舞踊教育論の変遷を検討すると、幼児教育研究の初期より、その教育的価値を認めていることが確認できる。しかし、1920年代になると、当時盛んに行われた学校劇や遊戯・舞踊の一般公開に強い懸念を示すようになる。そして、1930年代になると、引き続き「見せる」ことに対する批判をしながら、遊戯・舞踊が子どもの生活から最も離れている(倉橋 1934、p.119)と指摘し、子どもの生活のなかに遊戯・舞踊をいかにして取り入れるかを模索する論考が目立つようになる。その模索の一つとして、遊戯・舞踊の「ねらいどころ」を提示している(同前書、p.123)。

倉橋は「ねらいどころ」として、①「体育的効果」、②「動く興味」、③「みんなといっしょ」(同前書、pp.123-126)の3つをあげている。戦後になると、遊戯・舞踊論は復刊された著書には含まれているものの、新たに論じられたものはないと言ってよい。

しかし、晩年の倉橋の論には、これまでに述べてきた遊戯・舞踊教育論の根源がより明確に示されている。「幼児は芸術的である」と一貫して述べてきた倉橋であるが、幼児を不幸にさせるのは、「自分で創意の力のない人である」(倉橋 1949、p.3)と述べ、保育は常に創造的でなければならないと、出来ばえばかりを求める保育を戒めている。

倉橋の遊戯・舞踊教育論の特徴は、子どもの生活と遊戯・舞踊との乖離を埋めようと試みているところである。倉橋の「ねらいどころ」は、この問題を解決する手立てとして示唆を得ることができる。

第3章 和田實と倉橋惣三による遊戯・舞踊教育論の比較検討

第3章では、和田実と倉橋惣三による遊戯・舞踊教育論を比較検討し、両者の共通点と差異を指摘した。検討するにあたって、子どもの遊戯・舞踊における「模倣の重要性」と「遊戯・舞踊教育に対する批判」に着目した。

模倣の重要性について、両者ともその教育的価値を認め、子どもの表現の原点としての重要性を論じていることが明らかとなった。しかし、和田は模倣そのものの教育的価値を認めているものの、初期の「共同遊戯」に関する論では、規律が多く、幼児の興味を惹かない(和田 1908b, pp.22-23)と述べていることから、遊戯・舞踊における模倣に関しては否定的であったと推察する。しかし、1935(昭和10)年の時点で、彼は、幼児は模倣から大きく脱出することはなく、「模倣的遊戯を排斥するなどとは、飛んでもない」(和田 1935, p.13)と述べており、遊戯・舞踊における模倣を肯定的にとらえている。他方、倉橋は子どもが自発的に模倣することと、大人が示した型どおりに子どもが模倣することとに距離を感じて、遊戯・舞踊が子どもの生活と離れていると指摘している(倉橋 1934, p.119)。

遊戯・舞踊教育に対する批判に関しては、和田が倉橋に先立って、運動量の不足を論じている(和田 1908b, pp.21-22)。運動量の不足に関する論は、両者の共通点としてあげられる。しかし、後に和田は運動量の不足については、「保育事項としての遊戯は、必ずしも、体育効果のみを求むるものでもありませんから」(和田 1935, p.11)と述べ、指摘しなくなる。

両者の差異として、和田は、「音楽的遊戯」に遊戯・舞踊を含めていることから、音楽的側面を重要視し、倉橋は長年運動量の不足を指摘し続けていることから体育的側面を重要視していることが指摘できる。

第II部 遊戯・音楽教育の実践家による遊戯教育論・リズム教育論

第II部では、遊戯・音楽教育の実践家として、音楽教師から体育教師へ転向した経歴をもつ白井規矩郎(1870-1951)、体育教育のなかでも遊戯教育を専門とする高橋忠次郎(1870-1913)、遊戯の専門家として知られる土川五郎(1871-1947)、「総合リズム教育」を提唱した小林宗作(1893-1963)の遊戯・リズム教育論を検討する。小林のリズム教育論をここで述べるのは、子どもの遊戯・舞踊教育に大きな影響をもたらしたリトミックを取り入れた、独自のリズム教育論を構築し、実践しているからである。

第4章 白井規矩郎の遊戯教育論

第4章では、白井の音楽をとまなう遊戯教育論を検討し、その歴史的意義を明らかにすることを目的とした。白井は、音楽取調掛(現:東京藝術大学音楽学部)を卒業して音楽専科の教員を経て、体育教師として活躍しており、音楽に造詣の深い体育教師といえる。彼の遊戯教育論を検討した結果、①白井の遊戯研究の原点が幼児を対象とした遊戯であること、②日本におけるリトミックの受容以前に、音楽による聴覚の育成に着目していたことが特徴としてあげられる。

①に関して、白井は東京女子大学校(現:日本女子大学)の初代体育教師として活躍し、女子体育に尽力

した人物として知られているが、同校に奉職する以前に、『保育遊戯唱歌集』（1893）、『新編小学遊戯全書』（1897）、『実験詳説遊戯唱歌大成』（1900b）を発表しており、後の2著書からは、フレーベルを初めとする幼児教育者の論を研究していることが確認できる。

②について、日本に初めてリトミックが紹介されるのは、通説では明治40年代であるが、白井は1900（明治33）年の時点ですでにリトミックで述べられている、音を聴いて即座に動作に移す、即時反動的な動作によって聴覚を鍛えることを論じている。

また、白井の遊戯教育論の歴史的意義として、歌詞の意味を表現する遊戯から音楽のリズムを重要視する遊戯への移行を支えたことが指摘できる。白井は、『韻律体操と表情遊戯』（1923）のなかで、歌詞の意味を表現するデルサート式体操と音楽のリズムを重要視するリトミックを紹介している。徐々に歌詞の意味を表現するスタイルは衰退していき、リズムが台頭する。白井の『韻律体操と表情遊戯』に歌詞の意味からリズムへの過渡期の諸相をみることができる。

第5章 高橋忠次郎の遊戯教育論

第5章では、高橋の遊戯教育論および遊戯作品の分析をとおして、彼の遊戯教育論の特徴を明らかにした。高橋に関する史料は、遊戯教育論を語るものよりも競技を含めた遊戯教育論全般や、その作品を発表したものが多く残されている、したがって、高橋に関しては遊戯教育論に加えて、遊戯作品も併せて検討することとした。

高橋の経歴は、掛水（1981、2018）で詳細に論じられているが、なかでも日本遊戯調査会と東京女子体操音楽学校の設立に尽力した経歴が着目に値する。彼も、前章の白井と同様、女子体育に貢献した人物として取り上げられることが多いが、子どもの遊戯教育研究にも力を注いでいる。彼の遊戯教育論および遊戯作品を検討した結果、①幼児の実態を把握して、幼児期や児童期初期に「遊戯的」な体操を提案していること、②歌詞の模倣だけでなく音楽の拍節を活用することを示唆していること、③最終的に歌詞の模倣を中心とする遊戯や体操の衰退をいち早く論じていることが特徴として指摘できる。

①に関して、高橋は、「市内各所の幼稚園」を周り、実際に行われている遊戯の様子を視察しており、歌詞の模倣を中心とする遊戯は運動量が少なく、興味を欠くこと等を指摘している（高橋 1906a、pp.135-146）。そこで、比較的幼い子どもにも「遊戯的に」体操を取り入れることを提案している（同前書、p.109）。②に関して、彼の校訂書『幼稚園唱歌遊戯法』（1902）では、デルサート式体操をもとにした歌詞の模倣を中心とする遊戯をベースとしながらも、音楽を活用した拍節的な動きが取り入れられており、歌詞の模倣のみの遊戯からの脱却が見られる。③について、前出の『幼稚園唱歌遊戯法』（1902）の時点では認めていたデルサート式体操の衰退を『理論実際小学遊戯教科書』（理論の部）（1906a）で指摘していることが確認できる。

第6章 土川五郎の律動遊戯および表情遊戯

第6章では、土川の律動遊戯および表情遊戯の特徴と歴史的意義を整理かつ再検討した。土川は当時の遊

戯教育の先駆者として知られ、これまでに彼の遊戯教育に関する研究は多数存在するが、本研究においては、これまで着目されてこなかった幼児教育者としての土川の側面にふれながら、彼の遊戯教育論を検討する。

土川の教育者としてのスタートは小学校訓導であったが、1910（明治43）年に麴町小学校校長兼麴町幼稚園園長を務め、1923（大正12）年には自身で瑞穂幼稚園を創立するなど、幼児教育にも尽力している。

土川の幼児教育論および遊戯教育論を検討した結果、その特徴として①土川の遊戯教育論が実際の子どもを観察したところから生み出されたものであること、②「身体の発育」、「感覚の練習」、「精神の正しき誘導」（土川 1915、p.502）を幼児教育で行うことは、小学校入学前の重要な基礎教育と考え、遊戯教育論がその理念に基づいていることが指摘できる。

①に関して、彼は、京阪神の幼稚園を視察したところ、一部の幼稚園で唱歌や遊戯の際中に子どもの澁刺とした様子が見られず、懸念を示している（土川 1915a、p.15）。この懸念は、土川の遊戯教育論に大きな影響を及ぼしたと考えられる。②に関して、土川は家庭教育の欠陥を補い、小学校入学前の基礎教育を行う場として、幼稚園の必要性を論じている（土川 1915、p.502）。土川による遊戯教育論の歴史的意義は、もともと体育や音楽の専門家でない教育実践家が、実践から遊戯教育をとらえて普及させたことである。そのため、土川の遊戯教育論は、教育者や保母たちに支持され、普及していったのではないかと考えられる。

第7章 小林宗作のリズム教育論

第7章では、小林宗作のリズム教育の特徴および歴史的意義を再検討することを目的とした。小林は、自由ヶ丘小学校および幼稚園（トモエ学園）や日本リトミック協会を設立した人物として知られている。彼は遊戯・舞踊教育論を考えるうえで避けることのできない、独自のリズム教育論を展開している。

小林のリズム教育論の特徴は、①子どもとの関わりのなかでリトミックの欠陥を指摘していること、②リトミックにその他の教育方法を導入した小林独自のものであること、③幼児教育におけるリズム教育を「総合リズム教育」の前段階としてとらえていることである。①について、小林はリトミックを実践していくなかで、リトミックの欠陥に気づき、多くの教育方法を研究するに至っている。その成果が②の小林独自のリズム教育論の提唱である。③に関して、小林の「総合リズム教育」の図における教科名などの列挙と、『幼児の詩・音楽・舞踊』における見解から、幼児には幼児特有のリズム教育方法が存在することを示唆している。

小林のリズム教育論の歴史的意義は、リトミックをベースにした彼のリズム教育論は子どもとの関わりから考案されているため、実践的で保育・教育現場に導入しやすかったといえ、それがリトミックの普及につながったことである。リトミック研究に邁進しつつも、教育者としての立場を自負し、リトミック以外にも教育に効果的だと考えたものは積極的に取り入れた結果、他の教育者たちを納得させる論が構築され、後世にわたって小林の名が刻まれるようになったのである。

第8章 白井規矩郎、高橋忠次郎、土川五郎、小林宗作による遊戯・リズム教育論の比較検討

第8章では、音楽教師から体育教師に転向した経歴をもつ白井、遊戯の専門家として日本遊戯調査会の中

心人物である高橋、「律動遊戯」と「表情遊戯」を提唱した土川、「総合リズム教育」を創案した小林の4者を取り上げて、比較検討を行った。

まず、同じ1870（明治3）年に生まれ、明治中期より女子体育に貢献した白井と高橋であるが、音楽をともなう遊戯に関しては、異なる見解が見られる。白井は、幼い女子にも唱歌や音楽をともなう遊戯は適しており、特に歌詞の意味を模倣する表情遊戯は「容儀を整える」ために効果的であることを示している。一方で、高橋は行進遊戯の効果は認めているものの、表情遊戯は運動量が少なく、子どもの興味が続かないなど（高橋 1906a、pp.145-146）として、表情遊戯を批判している。ただし、高橋のいう表情遊戯は歌詞の模倣を中心とする遊戯であり、後の土川が提唱したリズムを重要視する「表情遊戯」とは異なる。

次に、大正期以降に活躍を見せる土川と小林の両者に共通するのは、子どもの実態を捉えた遊戯・リズム教育論を展開していることと、小学校入学前の基礎教育としての幼児教育の意義を示唆していることである。しかし、小林は「律動遊戯」の教育的効果がある程度認めているものの、「表情遊戯」に関しては疑問を呈している（小林 1929a、p.65）。この点において、小林と土川とは「律動遊戯」および「表情遊戯」に対する見解は異なっていたと推察される。

時系列で4者の論を検討すると、高橋は歌詞の模倣のみの遊戯からいち早く脱却し、白井は歌詞の模倣を中心とする遊戯からリズムを重要視する遊戯への転換期を支える。土川は、音楽のリズムを重要視した「律動遊戯」および「表情遊戯」を提唱し、小林はリトミックとその他の教育法を用いて、科学的に子どものリズム教育論を示したという系譜が明らかとなった。

第Ⅲ部 舞踊教育家による舞踊教育論

第Ⅲ部では、大正期から昭和期に活躍した舞踊家である、体育教育出身の印牧季雄（1899-1983）および西洋舞踊出身の石井漠（1890-1962）における舞踊教育論を検討した。

第9章 印牧季雄による学校舞踊教育論

学校舞踊は児童舞踊とともに大正期の童謡興隆期にもなって興った童謡舞踊を源流とし、昭和期に確立された教育現場における音楽をともなう子どもの身体表現の1つである。第9章では、「学校舞踊の育ての親」（全日本学校舞踊研究会 1951、p.32）と称されている印牧季雄（1899-1983）の経歴を整理し、先行研究の検討をとおして、彼自身や彼の学校舞踊論が舞踊教育の歴史のなかでどのように位置づけられるかを再確認・再整理し、その歴史的意義を明らかにすることを目的とした。印牧の示す「学校舞踊」の「学校」には幼稚園も含まれていることを先だつて確認しておきたい。

印牧は、1931（昭和6）年にドイツ留学を果たし、舞踊家のマリー・ヴィグマン（Wigman, Mary, 1886-1973）からノイエ・タンツ（＝モダン・ダンス）を学んでおり、彼女から大きな影響を受けている。印牧とヴィグマンの論を比較検討すると、①自己の生活体験や感情に目を向けた舞踊または舞踊教育を目指していること、②音楽リズムと舞踊（動き）のリズムの差異を認識していること、③自然運動に立脚した基礎的な身体訓練

を提唱し、それに感覚や感情を付加させることを重要視したことが共通点としてあげられる。一方で、ヴィグマンの舞踊論と印牧の学校舞踊論における大きな差異は、音楽からの脱却を試みたか否かである。印牧は子どもの舞踊には音楽が必須であることを強調し、ヴィグマンの「無音楽舞踊」を取り入れてはいない。

印牧の学校舞踊教育論の位置づけとして、①印牧は、学校教育の外で興った文化である童謡舞踊を、学校舞踊の名称を用いて、著書や教育活動を通じて、教育分野に浸透させた人物として位置づけられること、②印牧の学校舞踊論は、模倣が主流であった遊戯教育が行われていたところより、「リズム生活の体験」を舞踊教育の目的に掲げ、ノイエ・タンツの重要な要素である自己表現を目指した先駆的な見解を示したものとして位置づけられることがあげられる。

最後に、印牧の舞踊教育論の歴史的意義は、戦後の教育現場における「創作ダンス」の確立に貢献していることである。印牧の模倣にとどまらない舞踊教育論は、「創作ダンス」の理念に通じている。

第10章 石井漠の舞踊教育論

第10章では、石井漠の子どもの対象とした舞踊教育論を検討し、その特徴と歴史的意義を明らかにした。石井は、大正期から戦後にかけて、形式的な舞踊からの脱却を試み、独自の舞踊論を展開した人物であるが、舞踊教育家としての側面も見逃すことができない。

石井の舞踊教育論を検討した結果、その特徴として①舞踊教育の最初に子どもに自然物への興味をもたせることを説いたこと、②規制品が舞踊教育における基礎訓練となることを論じていることがあげられる。①に関して、リズムが自然的なものであることは、先の土川、小林、印牧の三者も述べているが、石井のように、具体的にどのように取り入れていくのかについては、述べられていない。②は、子どもに理論や基礎訓練を行っても、子どもが興味を持たなければ意味をなさないという考えから導き出された論である。

石井の舞踊教育論の歴史的意義は、舞踊家の立場から科学的に舞踊教育論を論じることを試みていることである。「今後の舞踊は、感情のみを以て創造する事は出来ない。(中略) 凡ての生活が科学的に歩を進めて居る現代では、感情のみで処して行く事は出来ない。科学的に研究する事が第一、で感情を塗るのはそれから後である。」(石井 1933b, p.9) と石井が言うように、舞踊教育論においても、子ども自身が自然物の動きを観察することから始めるべきだとしており、科学的視点をもつことを第一としている。

第11章 印牧季雄と石井漠による舞踊教育論の比較検討

第11章では、印牧と石井とによる舞踊教育論を比較検討した。印牧は、体育教育出身者であり、石井は西洋舞踊出身者であるが、両者ともマリー・ヴィグマンに大きな影響を受けたという共通点をもつ。両者の論を①舞踊教育の目的、②舞踊教育の方法、③舞踊における音楽の位置づけに焦点を当てて検討した。

その結果、①について、両者とも子どもにリズムを体験させることを目的とし、子ども自身の生活体験を舞踊に表現することが、子どもの成長を促すと主張していることが明らかとなった。②について、印牧は「予備と教授と整理の段階」が必要である(印牧 1949, p.42) と系統的に示しているのに対し、石井は自然物の

観察から動きへの興味をもつことから始めて、特に幼い子どもには基礎訓練を盛り込んだ舞踊を踊ることが提示されている。両者に共通するのは、独自の基礎訓練法を考案していることである。③に関して、両者とも舞踊教育において音楽のリズムが効果的であることを論じており、音楽のリズムを主とした舞踊を強調している。しかし、両者とも音楽を忠実に再現することが舞踊ではない（印牧 1933、p.187 および石井 1933、p.135）と述べている。ただ、石井は「音楽の視覚的翻訳」は無意味なものではないといい、リトミックと同様の意義があるとしている（石井 1933、p.129）。

以上3点に焦点を当てて検討したが、印牧が体育教育出身者としての立場から、教育現場に舞踊を取り入れる方法を系統的に示していることは、特筆に値する。

終章 明治中期から昭和中期における遊戯・舞踊教育論の特質

終章では、これまでに論じてきた分野ごとの特徴を整理したうえで、明治中期から昭和中期における幼児教育者、遊戯・音楽教育の実践家、舞踊教育家の遊戯・舞踊教育論を横断的に検討して特質を述べた。

第一の特質は、幼児教育者と実践家による幼児教育思想を原点とする遊戯論に、大正期以降、舞踊教育家により西洋の新舞踊の理念が加わって、子どもの自然で自由な舞踊教育を目指す舞踊教育論が形成されていたことである。すなわち、大正期以降の子どもの遊戯は、幼児教育の思想と西洋の新舞踊の思想とが融合して構成されているといえる。分野間の共通点として、本研究で取り上げた幼児教育者は勿論のこと、実践家もフレーベルやルソーをはじめとする海外の幼児教育に学んでいることがあげられる。また、舞踊教育家らは、従来の形式を打破した新しい舞踊を子どもの舞踊に取り入れている。

第二の特質は、子どもの舞踊における運動量の不足を懸念する論および歌詞の模倣を中心とする遊戯を批判する論が、明治中期から少なくとも昭和期戦前までは継続的に見られ、これらの問題が依然として解決に至っていないことを明示していることである。分野間を時系列で検討すると、日本における舞踊教育が歌詞の模倣を中心とする遊戯からリズムを重要視する舞踊への転換の系譜が明らかとなった。

第三の特質は、大正期以降、舞踊家の台頭により、西洋の新舞踊に加えて、日本舞踊の要素も子どもの舞踊に移入されるが、リズムを重要視する潮流のなかで、事物の模倣を特徴とする日本舞踊の形式が批判される傾向にあったことである。各分野で日本舞踊に対する批判がみられた。

以上を総括すると、大正期以降、明治期からのフレーベルをはじめとする幼稚園教育思想を原点とした遊戯教育論に西洋の新舞踊の要素が加わり、自然で自由な動作が取り入れられると同時に、身心の調和を目指したリズム体験の重要性が論じられ、子どもにとって相応しい遊戯・舞踊教育を旨とした遊戯・舞踊教育論が形成されてきたといえよう。

今後の課題として、第一に、舞踊教育家が講習会や著書などで示した舞踊教育論がどの程度現場で再現されたかについて検証をすること、第二に、本研究で垣間見られた各分野の専門家たちの交流を明らかにすることがあげられる。

Ⅲ. 文献

ⅰ. 主要史料

- 石井漠 (1933b) 「舞踊の科学的根拠」『科学と芸術』第 1 巻第 1 号、pp.6-10。
- 石井漠 (1936) 『子供の舞踊』フレーベル館。
- 印牧季雄 (1933) 『学校舞踊理論より創作へ』櫻木書房。
- 印牧季雄・丸岡嶺 (1949) 『学校舞踊創作の理論と実際』白眉社。
- 印牧季雄・若葉陽子・橋詰義子・丸岡嶺・森爽 (1951) 『範例保育舞踊集保育カリキュラム準據』白眉音楽出版社。
- 印牧季雄・森爽 (1954) 『保育舞踊の創作と指導』日本児童音楽協会。
- 倉橋惣三 (1925) 「幼児の舞踊について」『幼児の教育』第 25 巻第 6 号、フレーベル会、pp.12-21。
- 倉橋惣三 (1934) 「保育項目の実際—夏期講習会講義速記」『幼児の教育』第 34 巻第 8・9 号、フレーベル会、pp.53-145。
- 倉橋惣三 (1948) 「幼児保育の芸術性」『幼児の教育』第 47 巻第 6 号、フレーベル会、pp.2-5。
- 倉橋惣三 (1949) 「先生の創意の尊重—カリキュラムの問題にも触れて—」『幼児の教育』第 49 巻第 5 号、フレーベル会、pp.2-5。
- 小林宗作 (1929a) 「幼稚園教育の可否に就いて (その一)」『教育問題研究・全人』第 33 号、成城学園、pp.59-68。
- 小林宗作 (1931a) 「帰って来ました」『教育問題研究・全人』第 57 号、成城学園、pp.122-127。
- 小林宗作 (1935) 『総合リズム教育講座第一編 総合リズム教育概論 昭和十年版』(『大正・昭和保育文献集』第四巻、日本らいぶらり、1978、pp.123-198)。
- 小林宗作 (1938) 「幼児の詩・音楽・舞踊」『幼児教育全集』第七巻 (『大正・昭和保育文献集』第四巻、日本らいぶらり、1978、pp.199-242)。
- 白井規矩郎 (1893) 『保育遊戯唱歌集』敬文堂。
- 白井規矩郎 (1897) 『新編小学遊戯全書』同文館。
- 白井規矩郎 (1900b) 『実験詳説遊戯唱歌大成』同文館。
- 白井規矩郎 (1923) 『韻律体操と表情遊戯』敬文館。
- 中村五六・和田實 (1908a) 『幼児教育法』フレーベル会 (『明治保育文献集 第九巻』(1977) 日本らいぶらり)。
- 高橋忠次郎・依田直伊 (1900) 『音楽応用女子体操遊戯法』山海堂。
- 高橋忠次郎校訂・山田春耕編 (1902) 『幼稚園唱歌遊戯法』共益商社。
- 高橋忠次郎 (1906a) 『理論実際小学遊戯教科書』(理論之部) 榊原文盛堂。
- 土川五郎 (1915a) 「京阪神の幼稚園視察 (東京市保育研究会に於ける講演)」『婦人と子ども』第 15 巻第 1 号、フレーベル会、pp.9-18。

- 土川五郎（1915）「幼稚園に対する予の希望」『婦人と子ども』第 15 巻第 12 号、フレーベル会、pp.502-504。
- 土川五郎（1917b）『律動遊戯』第一集、律動遊戯研究所。
- 土川五郎（1925b）『律動的表情遊戯』第一集、十字屋楽器店。
- 山田源一郎・高橋忠次郎編（1901）『実験唱歌遊戯教授書』目黒書店・成美堂。
- 和田實（1908b）「幼稚園に於ける所謂共同的遊戯に就いて」『婦人と子ども』、第 8 巻第 10 号、フレーベル会、pp.21-23。
- 和田實（1908c）「再び幼稚園の共同遊戯に就いて」『婦人と子ども』第 8 巻第 11 号、フレーベル会、pp.24-30。
- 和田實（1913）『幼児保育法』北区保育会。
- 和田實（1926）「保育事項としての『観察』に就いて」『幼児の教育』第 26 巻第 9 号、フレーベル会、pp.22-32。
- 和田實（1932a）『実験保育学』フレーベル会（『大正・昭和保育文献集 第十巻』（1976）日本らいぶらり）。
- 和田實（1932b）「聞かせる唱歌に就いて」『幼児の教育』第 32 号 1 巻、フレーベル会、pp.36-38。
- 和田實（1935）「保育事項としての遊戯に就いて」『幼児の教育』第 35 巻第 1 号、フレーベル会、pp.11-15。
- 和田實（1943）『保育學』日本保育館。

ii. 主要引用・参考文献

- 板野晴子（2016）『日本におけるリトミックの黎明期』ななみ書房。
- 大沼覚子（2011）「大正から昭和初期の保育における音楽活動の理論と実際」東京芸術大学博士論文（博音第 194 号）。
- 掛水通子（1981）「女性初の体育教師養成機関の創設：高橋忠次郎」『近代日本女性体育史—女性体育のパイオニアたち—』日本体育社、pp.79-102。
- 掛水通子（2018）『日本における女子体育教師史研究』大空社。
- Kraus, Richard（1969）“*History of the Dance*”, Prentice-Hall.
- 全日本児童舞踊協会（2004）『日本の子どものダンスの歴史—児童舞踊 100 年史』大修館書店。
- 全日本学校舞踊研究会（1951）「会の音沙汰」・「編集スケッチ」『月刊学校舞踊』八月号、NO.5、白眉音楽出版社、p.32。
- 戸江真以（2015b）「明治期における唱歌遊戯に関する一考察—『実験唱歌遊戯教授書』を中心に—」中国四国教育学会『教育学研究紀要（CD-ROM 版）』第 61 巻、pp.329-334。
- 戸江真以（2016a）「明治期の唱歌遊戯に関する一考察—『幼稚園唱歌遊戯法』（1902）の検討を中心に—」広島大学大学院教育学研究科『音楽文化教育学研究紀要』XXVIII、pp.101-109。
- 戸江真以（2017a）「和田実の『音楽的遊戯』論」広島大学大学院教育学研究科『音楽文化教育学研究紀要』XXIX、pp.63-70。

- 戸江真以 (2017b) 「大正期から昭和期戦前の遊戯及び児童舞踊に関する研究—土川五郎と印牧季雄の理論に着目して—」 中国四国教育学会『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第 63 巻、pp.549-554。
- 戸江真以 (2018a) 「昭和期戦前における印牧季雄の児童舞踊に関する一考察—音楽と動作の関係性に着目して—」 広島大学大学院教育学研究科『音楽文化教育学研究紀要』XXX、pp.31-37。
- 戸江真以 (2019) 「印牧季雄の舞踊教育観—舞踊教育の目的と教材に着目して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部 (文化教育開発関連領域)』第 68 号、pp.299-306。
- 戸江真以 (2021) 「児童舞踊家によるリズム教育 (1) —『文部省新訂小学唱歌各学年の舞踊』(1935) に着目して—」『福岡女学院大学紀要人間関係学部編』第 22 号、pp.79-88。
- 戸江真以 (2022) 「印牧季雄による『リズム生活』の体験を重要視した学校舞踊論の歴史的意義—マリー・ヴィグマンの理論との比較検討をとおして—」『音楽教育史研究』第 25 号、pp.3-14。
- 名須川知子 (2004) 『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』風間書房。
- 松本千代栄・安村清美 (1983) 「大正・昭和前期の舞踊教育—『遊戯』から『ダンス』へ—」『舞踊学』第 6 号、pp.1-7。
- 南元子 (2014) 『近代日本の幼児教育における劇活動の意義と変遷』あるむ。
- Müller, Hedwig (1992) “*Mary Wigman Leben und Werk der Grossen Tänzerin*”, Quadriga.
- ミュラー、ヘートヴィヒ／小高慶子訳 (2003) 「マリー・ヴィグマンの舞踊芸術」『慶応義塾大学アート・センター／ブックレット 10 身体をキャプチャーする—表現主義舞踊の系譜—』慶応義塾大学アート・センター、pp.18-36。
- 村山茂代 (2000) 『明治期ダンスの史的研究—大正 2 年学校体操教授要目成立に至るダンスの導入と展開—』不昧堂。
- 湯川嘉津美 (1999) 「倉橋惣三の人間学的教育学—誘導保育論の成立と展開—」『日本の教育人間学』玉川大学出版部、pp.60-80。